

# サビエル生誕五百年



## 巡礼の道

55

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

### 信仰の街・トレド

首都マドリッドから南約七十キロに中世の面影が色濃く残る古都トレドがある。

タホ川に囲まれるように建つトレドの街は今でこそ人口約七万人の小さな丘の街だが、かつてはスペインの首都であった。六世紀に西ゴート王国の首都になって以来、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の文化を融合させながら大きく発展した。

面では、今もスペインの中心的存在を保ち続けているという。トレドの細い道を歩きながら、街の歴史と今の自分とを重ね合わせていた。六十五歳で、四十三年間働いた会社を辞めた。余りに会社中心の生き方であった。退職を機会に会社近くの教会から自宅近くの教会に所属を替え、毎朝、ミサに預かり、信仰とは何かと自分に問いかける。アクセサリーのような信仰になってないか。ヨーロッパの教会も

歴史的遺産としての価値はあっても、信仰面

で現代社会にそれをどう生かしているのだろうか。会社を辞めたことと政治、経済などの中心でなくなったトレドに何か共通点を見いだしたような気がした。古都トレドは迷路のように細い道が入り組んでいる。迷いそうだが、高くそびえるカテドラルが目印となる。人生の羅針盤のよう



タホ川の対岸から見たトレド旧市街

に。  
〈エル・グレコ〉  
スペイン絵画の三大巨匠の一人、エル・グレコはトレドをこよなく愛したという。「エル・グレコ」とはスペイン語で「あのギリシヤ人」という意味で、彼のあだ名である。

出世などには関係なく、イスラム、ユダヤと融合したキリスト教風土のトレドの街でこそ、聖書の世界を描いた名画の数々が誕生し得たのではないだろうか。

「三位一体」キリストの磔刑「キリストの復活」「五旬節」「聖母の被昇天」などエル・グレコの名画が信仰を表現してくれている。エル・グレコの絵が単なる歴史遺産の街ではなく「信仰の街トレド」へと私を導いてくれている気がする。

で、クレタ島で生まれ、イタリアを経て三十五歳ごろスペインにきた。宮廷画家を目指したものの彼の作品は王様に気に入られず、首都マドリッドを離れ、トレドに住むようになった。以来、七十三歳で亡くなるまで四十年近くトレドを離れることはなかった。

それがトレドで細長く、重力を失ったかのように描き始めたのは、肉体を超えた精神の世界の表現ではないかと言う人もいる。「最も純粋なスペイン

（元山口放送取締役ラジオ局長）



土産にももらったこの絵「略奪」はトレドの大聖堂にあった